

科学研究費助成事業（特別推進研究）研究進捗評価

課題番号	24000012	研究期間	平成24年度～平成28年度
研究課題名	神経ダイナミクスから社会的相互作用に至る過程の理解と構築による構成的発達科学		
研究代表者名 (所属・職)	浅田 稔 (大阪大学・大学院工学研究科・教授)		

【平成27年度 研究進捗評価結果】

該当欄		評価基準
	A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
	A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
○	A-	当初目標に向けて概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
	B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である

(評価意見)

本研究の進捗状況は、(a)ニューロンレベルの神経ダイナミクスのシミュレーション、(b)ニューロンの集団活動及びイメージング、(c)心理・社会実験による発達過程の研究、(d)ロボットプラットフォームの研究開発の4サブテーマについては成果が出始めており、論文発表状況も順調であると判断した。

しかしながら、本研究のテーマである「神経ダイナミクスから社会的相互作用に至る過程の理解と構築による構成的発達科学」という分野の構築、総合的な研究目標達成を実現するための全分野を統合した目標の設定と研究の方向性の集約は十分ではない。現在の研究が更に発展しても個別分野の成果は出るものの、本研究テーマが目指す形に統合されるかについては不明確な部分がある。研究期間終了時までには達成する各サブテーマの進捗に加え、全体としてどのように構成的発達科学の確立を実現するのか、最終的な成果の在り方についてさらに検討しつつ、統一感のある研究が遂行されることを期待する。

【平成29年度 検証結果】

検証結果	4つのサブテーマに関し、個別の研究成果は上がっているものの、当初の目標があまりにも高かったため、目標達成が十分でない。論文を通読すると目標達成に向けた努力はよく理解できるものの、本研究から新たに得られた知見というより、既存の研究成果のサーベイと展望といった性格が強く、新しいパラダイムが明確に確立されているとは言い難い。
A-	個別の分野としては、脳機能イメージング分野で、小中学生のイメージングを行い、自他認知の部位変化・発達過程が多人数で確認できたという顕著な研究成果を上げている。一方において、研究代表者の専門分野でもあり、本研究を特徴づけているロボットプラットフォームの研究開発からのニューロレベルへの研究成果や社会実験へのフィードバックはやや不十分である。